

【2019年11回目の法要を終えて】

去る10月7日、文珠山法輪寺にて今年で11回目になる法要を無事終えることができました。今年は一ツツステイに16名の方がおいでくださいまし

た。お一人玄界灘の波が高く、おいでになれなかった方があり残念でした。なかでも、昨年に続き林侃道さま、大西龍心さまという、お坊様がお二方おいでくださったことは、誠に心強く、有難いことでした。



はじめて雨に見舞われた法要でしたが、濡れた境内もしつとりと美しく、心穏やかな法要となりました。

個人的には重陽節というと毎年のように足を痛めていた私でしたが、今年は元気に境内を歩くことができました。またお陰様で、事前に法輪寺をお訪ねして打ち合わせもできましたので、今年の法要はプログラムも盛りだくさん。日韓の仏教文化を十分に体験できたテンプルステイであったと思います。



林侃道師には坐禅指導をしていただきました。

また法要の折には大西龍心師、林侃道師がお経をあげてください、法輪寺信徒さんたちも、私たちも胸にしみいる思いで極楽殿に響く読経に

傾けました。



テンプルステイのプログラムもとりどりに楽しみました。
境内案内の後、修行僧でもめったに撞くことが許されない
という梵鐘を突かせていただきました。それぞれが願いを
込めて撞くのです。

一番に指名された私は、スニムに願い事を尋ねられました。

「御霊が同胞たちから労わられる日がくることを祈って」と申し上げようとし
ましたが、涙があふれ、絶句してしまいました。

夕暮れの山にそれぞれの想いを籠めた、鐘の音が響き渡りました。

スニムの先導で鐘閣から私たちの勉強の場である如如堂(ヨヨダン)まで、
「経行」を行います。列をなし、「右足・左足・右足・・・」と一步一步を丁寧に
踏みしめながら歩きます。雑念がいかに多いかを実感するひと時でした。

如如堂では「短珠作り」をしました。(108珠の長
いものを念珠、手首につける短いものを短珠とい
います)

棗の木で作った、仏教的意味のこもった五色の
珠を繋ぐのですが、二人でペアになり、相手に感謝の言葉を一つ述べ、
一つ珠を繋いでゆきます。



「本日はおいでくださってありがとうございます」と合掌して、紐に一つ珠を通すのです。

感謝の気持ちが沢山込められた短珠を、最後は互いに交換します。



こんなに貴重な短珠があるのでしょうか。本当にありがたく、良い記念になりました。

翌朝はまだ暗い4時から本堂である大雄殿で朝のお勤め(礼仏／예불)が始まります。

10分ごとに、様々な鳴り物の音が響きます。

境内をめぐる木鐸の音。

続いて山々に響く荘厳な大鐘の音。

最後に大雄殿に銅鑼の音が鳴り、厳かな読経が始まります。

大雄殿の石仏に見守られながら、それぞれの音色に耳を傾けていると、心は次第に静かになっていきました。

今回のスペシャルイベントは「お受戒」の儀式です。

「受戒」とは、仏の教えに帰依し、定められた戒を守ると誓うことです。

法輪寺のご住持からは韓国語で、林侃道師からは日本語で戒を保つかと

尋ねられ、私たちも五戒を保つことを日韓両国語で返答をするのです。や



はり私は、「アルゲッスムニダ」と答えるよりは、「良く保つ！」と禅問答のように答える方に格式を感じました。^^

そしてキリスト教の洗礼のように、三回お水で額

を湿していただきます。また、それぞれに受戒を受けた証としての「受戒証」とともに「法名」をいただくのです。

法名は事前に生年月日と姓名をお知らせしておき、ご住職がそこから靈感を得て付けてくださいます。



みな仏弟子としての尊く新しい自分の名前を、神聖な気持ちで嬉しくいただいたのでした。

当日この法要に駆けつけてくださった

方々もあり、今年の重陽節の法要は信徒家族の方々よりは、「帰郷祈願碑」に集う私たちの方が多かったです。

韓国における「重陽節」の法要は、客死(旅先で亡くなること)や、この世に生まれ出でることのできなかつた子供さんの御霊を弔うという意味もあるそうです。そして、信徒さんにとっては、その年に親族を亡くされた方を弔う

法要でもあるのです。

「帰郷祈願碑」を祀る。

太平洋戦争時下に異国の地でなくなった韓国人青年たちを弔うとするならば、この日をおいて他にないというご住持のお言葉をいただき、私たちは毎年旧暦の九月九日のこの日に集い、法要を重ねて参りました。

そして信徒さんにとっては、その年に家族を亡くした方々が、その御霊を弔うために行う法要でもあるのです。

私たちはそんな法輪寺信徒さんたちのご理解の許、皆さんの法要に加えていただいているのです。

日韓両国から「棄民」のように扱われた御霊が、いつか同胞たちによって労われ、弔われる日がくることを願い、私たちは年に一度、こうして玄界灘を越えて法輪寺に集います。

時には親日派との誹りを受ける韓国青年たちの御霊。

なかには家族でさえ、傍目を気にして祭祀ができないという方もあります。仏者として、「誰かがこの御霊を救わねばならない」とあえて、火中の栗を拾うような決断をしてくださった法輪寺の鉉庵スニムには感謝に堪えません。スニムがいらっしやらなかったら、彼らは今も、異国の地に虚空をさまよっていたことでしょう。

残念ながら、反日勢力の抗議によって石碑は現在横たえられた姿です。

大韓民国の未来と、続く若人たちの繁栄を願いながら、自らは犠牲になっ

ていった方々を、このように扱ってよいものでしょうか。



雨に濡れた石碑は「忘れないでくれ、俺たちのことを！」と厳しく問うているようでもありました。

毎年、法要の後は日本風に言えば「精進落とし」でしょうか、そんなお席を設けさせていただいております。

今年は、この石碑建立までの紆余曲折を描いた拙著、『それでも、私はあきらめない』(WAC 出版)の刊行に際して、前橋にお住まいの丸山千愛里先生がくださった「ご褒美」で皆様のお席を設けさせ

ていただくことができました。

丸山先生には心から感謝申し上げます。

法要からソウルに戻った私たちは、ここ数年恒例としている仁寺洞の某食堂に集まり、楽しく祝杯を上げ、朝に誓った五戒の「酒を飲まない」を早々に破ったのでした。^^

お釈迦さま、どうかお許してください。m(_ _)m

この席には拙著を韓国語版として出版して下さったタイムライン社の吉道炯社長、またこの本の韓国語訳を進言して下さった李宇衍教授、親日派との誹りを受けながらも正しい歴史を伝えるために努力なさっている鄭安基教授がご参加くださいました。

本来は法要にもご参加の予定でしたが、直前に起きたある言論人の軽率な行いのために、万一を考えて法要の参加は見合わせました。

来年は是非、慰霊の場においでいただき、私たちの真心からの、つつましい慰霊の姿を見ていただけたらと願っております。



今回の法要は例年にも増して感動に包まれた法要であったと思います。

皆さんが互いのことを思いやってくださり、

私も本当に助けていただきました。

そんな感動は冷めやらず、私の Facebook には皆さんの熱い投稿とコメントが続きました。

Facebook で黒田福美を検索していただき、10月6日くらいからの投稿を見ていただければ、皆さんの多くの投稿写真とともに今回の私たちの感動を共にしていただく事ができると思います。

来年の重陽節は10月25日、日曜日です。

有難いことに、私を支えてくれる仲間がいてくれます。

彼女たちと、来年に向けての更なる工夫を楽しく企てているところです。

私はこのように願っています。

法輪寺での重陽節の法要が、日韓の仏教文化に親しむ場になることを。

そしていつか、「あの時代に、鉉庵スニムの決断は本当に立派な行이었다」と法輪寺と鉉庵スニムの称讃される日が来ることを。

御霊が法輪寺に安らかにとどまり、ここから故郷の山河へ、父母の御胸へと帰還なさいますことを。。



最後に、大西龍心師が詠んでくださった短歌をご紹介します。

源へ 還りたき人 数多ある

ただひたすらに 祈る人ある

合掌 法香心 黒田福美